

---

# 月夜に舞う桜

月城琴音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月夜に舞う桜

### 【Nコード】

N2107A

### 【作者名】

月城琴音

### 【あらすじ】

会社員の潤はまだ恋をしたことがない。そんな彼が恋をしたのは中学生の泉奈。泉奈の純粋さにひかれてゆく潤。だが…泉奈にとって潤はただの友達…

## 1・桜の舞う公園で

あれはまだ桜の咲く春だった。その日、俺は夜の公園を散歩していた。

人気のない公園、俺は一人ベンチでたたずんでいた。

「今日も疲れたな」

溜め息混じりにつぶやいていると、俺の耳に誰かの声が聞こえてきた。

「ミル、おいで、ミル」

声のする方に目をやると、そこには猫を抱き上げる女の子

俺はハツとした。まだ中学生ぐらいの女の子、純粹な笑顔で猫の頭をなでる姿は、まるで天から舞い降りた天使のようだった。

俺がしばらくその子を見つめていると

「こんばんは」

俺の視線に気付いたのか、こちらに微笑む少女

「あつ…こんばんは」

ぎこちない返事、それでも彼女は俺に話しかけてくれる。

「お散歩ですか？」

「は、はい、そ、そうなんです」

またもやぎこちない返事、俺は不意に彼女に挙動

不審と思われていないか不安になった。

「そうなんですか？私もこの子とよく来るんですよ」

彼女は猫にほうずりしながら言った。

「ああ、そうなんだ」

俺は緊張のせいか、笑顔を引きつらせていた。すると、彼女は心配そうに俺の顔を覗き込み

「大丈夫ですか？具合：悪くないですか？」

「い、いえ、だ、大丈夫です」

そう言うと、彼女はニツコリと笑い

「良かった、何もなくて」

ほっとしたような彼女の表情、その表情を見て、俺の緊張も次第にほぐれていった。

少しの沈黙が続き、ぼんやりとつぶやく彼女

「夜の桜もきれいですね、なんか風情があつて」

俺も彼女の視線の先を見る。

「ほんとだ、今日は満月だから余計にきれいに見える」

俺たちはしばらく夜桜見物にふけていた。

ふと、彼女が思い出したようにこう言った。

「あつ、もう、こんな時間だ」

時計を見るとすでに9時を回っていた。

「じゃあ、私帰りますね」

「ああ…」

なんか素っ気ない返事をしてしまった。

彼女は猫を抱き、公園を出ようとしていた。

俺がぼんやり見ていると、こちらへ振り向き

「また会えるといいですね、じゃ、また」

「…また」

手を振る彼女に作ったような笑顔で手を振る俺

何をそんなに緊張しているのだろうか？相手は女  
といっても中学生ぐらいだ。

俺とは10歳以上離れてるし、それに…俺には付  
き合ってる奴だっている…

俺は家に帰り、一人あれこれと考えていた。

だが…女がいるといっても…好きという気持ちは  
ほとんどない。

ただ告られたから付き合っているという感じた。

…何だろう？この気持ちは…人を好きになるって  
…こんな気持ちなのか？しかし、俺が誰かを好きになるなんて…

## 2・初恋の予感

次の日も俺はあの公園へ行った。泉奈せなの

「また会えるといいですね」

という言葉に胸に…

昨日と同じ時間、また猫を連れた彼女が現れた。

彼女は俺を見つけると

「うわあ、また会いましたね」

嬉しそうに笑う彼女に微笑み返す俺

「毎日お散歩してるんですか？」

「いや…昨日から…この桜を見るに…」

とつさに適当な口実を作ってしまった。

「へえ、私もなんです。この公園の桜ってすごくきれいでしょ？だから春になるとお散歩に来るんです」

少しずつ二人の距離が縮まってゆく…俺は今までにないような幸せをかみ締めていた。

しばらく公園に通う日々が続い

た。そしてあの日がやって来た。

「もう…桜散っちゃいましたね」

悲しげに桜を見つめる泉奈

「もうここには来れないですね」

俺はとつさに彼女に尋ねた。

「春しか来れないの？」

彼女は葉桜になってしまった木を見つめ

「この子も私も…桜が好きだから…だから毎年、桜の咲く頃だけ来

るんです」

桜の咲く頃だけ…俺は泉奈の寂しげな瞳を見つめていた。

「せっかく潤さんにも会えたのに…」

俺は泉奈と離れたくないという思いでこう言った。

「あ、あの、お、俺とお友達に…なってください」

さすがに相手は中学生…付き合ってくれとは言えない…

少し間を置き、彼女は不思議そうに言った。

「私と潤さんはずっとお友達ですよ」

「…」

俺が沈黙していると、思い付いたような泉奈の一言

「そうだ、交換日記しましょうよ」

「交換日記？」

「はい、私、男の人と交換日記するの夢だったんです」

嬉しそうな彼女、それを見て俺の心が癒されてゆく…

そして、俺たちは週に一回、この公園で日記を交換することを約束し、桜の散ってしまったここを後にした。

### 3・日記に綴られてゆく日々

一週間後、初めての日記を交換する日が来た。

少し早く着いた俺に手を振る泉奈

「潤さん」

相変わらずの天使のような笑顔

「じゃ、一週間後」

「ああ、またな」

泉奈を見送り、手渡された日記を読んでみた。

潤さんへ      今、これを書

いてるのは、潤さんと会った次の日です。今日は天気もよくって、気持ちいい日でしたね。

教室の窓から見える青空がすごくきれいでした。

潤さんは今何してますか？仕事？かな？

また会えるのを楽しみにしてますね。

From 泉奈

ものなのか…  
たわいもないこと…だけど幸せ…これが恋という

しばらく互いの近況を報告する

日々が続いた。そして、ある日の日記

今日、一つ年上の男の子に

「付き合って」

って言われました。

前から手紙とかもらってたけど…やっぱり迷ってます。

潤さんならどうしますか？付き合いますか？それ  
とも…  
彼女にと

って俺はたたの友達…所詮…相手は中学生、俺は自分の気持ちをぐ



つと堪え、こつ書いた。

それは泉奈ちゃんしだいだよ。

付き合うも、付き合わないも。

一週間後こんな返事が来た。

やっぱり、断りました。

ありがとうございました。潤さんのおかげで決心ができました。

俺はほつとした。

彼女にとって俺はたたの友達…それでも嬉しい。

#### 4・忘れかけていたもの

泉奈と出会って三ヶ月、真夏の太陽が照りつける昼下がり、俺は会社の同僚に呼び出されていた。

会社の同僚…そう、それが俺の彼女

「最近冷たいわね」

「そうかな…？」

「冷たいのは今に始まったことじゃないけど、最近特に冷たく感じる」

それはそうだろう、俺には恋愛感情がないんだか

ら…

「あたしのことどう思ってる？」

「…好きだよ」

いつもの嘘、もつづくことにためらいはない。

「ほんとなの？」

「いつも言ってるだろう」

少し視線をそらす俺

「なら、どうしてデートしたいって言っても、断ったりするのよ？」

「…それは」

何も言えない…

「何よ？」

「それは…疲れてるからだよ」

顔を背けてしまった。

「はあ」

溜め息をつく海里みさと

「いつもそうね、素っ気ないわね」

「…」

「しょうがないわね、こんなあなたを好きになってしまったんだから」

開き直ったような海里

言えない…あいつが好きだなんて…

「今日の夜…」

不意に彼女が口を開いた。

「今日の夜、会えないかしら？」

「ああ」

「6時に会社の前ね」

「…ああ」

行ってしまった…俺には海里もいた…泉奈はただの友達…そうそれ以上の何者でもないんだ…

## 5・もう一人の大切な人

その日の夜、俺は海里とレストランで食事をしていた。

「ねえ、昼間はあんなこと言ったけど、本当は誰か好きな人がいるんじゃないの？」

「……」

俺は動揺し、何も言えなくなっていた。

「違うの？」

「……いいいや……」

まともに顔が見れない……いや見れるはずがない。

「あたし分かってた、付き合ってたって言った時から……分かってた」  
「……何がだよ？」

少し涙ぐんだような彼女の目、それを見て、余計に動揺してしまう俺がそこにいた。

「最初から、あなたがあたしなんか、好きじゃなかったってこと」  
「そ……それは」

言葉が詰まってうまく言えない。

「いるんでしょ？好きな人？」

「……あ……ああ、いる……」

俺はもうこれ以上嘘はつけないと思い、正直に打ち明けた。

「初めてだったんだ、あんな風に人を好きになったの……」  
「……」

海里は目を潤ませ、黙ったまま口を開かない。

「悪かったとは思ってる、だけど…今の俺には泉奈しかないんだ」

彼女は黙ってこちらを見つめている。

俺もそれ以上は言えなくなり、ただ時間だけが過ぎた。

そして、彼女が口を開いた。

「…あなたが好きになったんだもん、きつといい人なのね」

「ああ」

海里はどこか寂しげな瞳をしていた。

「どうしたの？」

「それが…相手は中学生なんだ」

彼女が一瞬、何が起きたのか分からないというような顔をした。

「相手は公園で知り合った中学生なんだ」

「…」

獣を見るような目で俺を見る彼女

「ち、違う、そんな怪しいのとは違う、ただ俺は…彼女の純粋さにほれたんだ」

少し疑ったような海里の視線が、俺の胸に突き刺さる。

「初めてだったんだ…人を好きになったの…」

俺はいつの間にか頬を涙でぬらしていた。

それを見て彼女も分かってくれたのか、優しい目でこう言った。

「…初恋か…」

彼女のどこか遠くを見つめる目、俺の心が締め付けられる。

「…お…お前のことも好きだ…だけど、今の俺にはあいつしかないんだ…」

うつすらと笑顔を浮かべる海里

「たとえ、あなたに好きな人がいても、あたしはずっとあなたを好きでいる。もし、あなたがあたしを忘れても、あたしはあなたを影から見守り続ける…」

「…海里」

彼女は優しい笑顔で言った。

「最後に一つだけ…これからもずっと…友達でいたい」

「ああ」

俺は今までにないほど力強い返事をした。

「かんばってね」

「がんばるよ」

## 6・再びあの場所で

俺は海里と別れ、泉奈のことを考える日々を送っていた。

月日は流れ、交換日記も続いていたが、泉奈との距離は一向に縮まらない。

俺はどうしても彼女に会いたくなり、あの公園に呼び出した。

枯れ葉の舞う公園、どこか寂しげだ。

「潤さくん、久しぶり」

彼女の弾むような声、それを聞き、俺の顔から自然と笑みが零れる。

たわいもない話が続く。それでも彼女は笑ってくれる。

幸せ…ずっとこんな時間が続いて欲しい…

「今日は楽しかったです。じゃあ、また会いまし

ようね」

「またな」

笑顔で泉奈を見送る。だが…伝えられなかった。

彼女のことを思えば思うほど、苦しくなる。

伝えたい…もし…叶わなくても、嫌われたとしても…

俺は面と向かって伝えるのが怖くなり、日記に書くことにした。

泉奈ちゃん、二人が出会って半

年が過ぎたね。

桜の舞う公園で、初めて純粋な瞳で猫を抱く君を見て、俺は恋に落ちたんだ。

泉奈ちゃんが俺なんかに興味ないのは分かっている。俺と泉奈ちゃんは単なる友達…だけどこの気持ちだけは伝えなかった。

嫌われるかもしれないけど、もし、この俺でいい

なら、今度の日曜日、朝10時にあの公園に来てください。

そして、日曜日、俺はあの公園にいた。

半分諦めはついていた。振られても仕方ない。

10時を少し過ぎた。やはり彼女は来ない…  
諦めていたとはいえ、初めて好きになった人…やはり悲しい…

俺の目から涙が零れ落ちる…拭っても、拭ってもあふれる涙

そして、俺の涙が涸れようとした時

「潤さん？」

振り向くと、どこか悲しげな目をした泉奈がいた。

「泉奈ちゃん…どうして泣いてるの？」

彼女は目をこすりながらこう言った。

「大切な人が泣いてると、私も悲しい」

俺は潤んだ目で、泉奈をじっと見つめた。

「…じゃあ…俺と付き合ってくれるのか？」

「…うん」

俺は嬉しくなり、思わず泉奈を抱いてしまった。  
ずっとこうしていたい…もう二度と放したくない

…



## 7・俺の知らない泉奈

あの日から俺たちは、日曜の度に会うようになった。

冬、雪の季節、そして、初めて二人で過ごすクリスマス

何もかもが幸せだった。

年が明けたある日曜の午後

今日はいつもと違う。

「どうした？なんか今日は、顔色が悪いけど」

「うんうん、何でもない」

いつものように笑う泉奈、だが苦しそうに見える。

「体だるいのか？」

「うん…少しね…私体弱いから、ちょっと風邪ひくと、苦しくなるの、でも大丈夫だよ、ふふっ」

一生懸命笑う彼女

「でも…無理

しない方が」

「大丈夫…」

ふらつく泉奈

「おい、大丈夫か？」

「…っ」

苦しそうに呼吸する泉奈、思わず俺は、彼女を自分の方に抱き寄せる。 「…ふう…ふう…」

俺は苦しそうな彼女を抱き、病院へ走った。

病院に着くと、すぐに治療が行われた。

廊下の待合で俺は、ただひたすら祈ることしかできなかった。

しばらくして、一人の女の人が、俺に話しかけて来た。

「潤さんですか？」

「は…はい、そうですか」

「泉奈の母です」

俺は驚いた。

目の前には彼女の母親、また中学生の娘に手を出してと、言われるのではないかと、怖くなった。

「いつもありがとうございます。」

あの子、あなたに会うのが楽しいみたいで」

怒られるどころか、礼を言われている。俺は複雑な気持ちになった。

「あの子が今まで、元気に過ごせたのも、あなたのおかげなんですよ」

「僕の？」

「そう、あなたがいたから、泉奈は小さい頃から体が弱くって、ずっと家に閉じこもりがちだったの、けど、桜の季節になると、猫を連れて公園へ行くの」

俺は泉奈との初めての会話を思い出していた。

「そして、あなたと知り合ったのね。」

嬉しそうに話してた、新しい友達ができたって、あんなに笑ってるの久しぶりに見たわ」

…そんな風には見えなかった。まさかあいつが…

「本当にありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、僕も泉奈ちゃんのおかげで、幸せでした」

俺は精一杯の笑顔でそう答えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2107a/>

---

月夜に舞う桜

2010年10月28日05時59分発行